和歌（後拾遺和歌集・新古今和歌集）＊＊

次の歌について、後の問いに答えなさい。［50点］

A　男に忘られて侍りけるころ、貴船に参りて、御手洗川に蛍の飛び侍りけるを見て詠める　和泉式部
もの思へば①沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る（『後拾遺和歌集』巻二十・雑六）

B　男ども詩を作りて歌に合はせ侍りしに、水郷の春望といふことを　後鳥羽上皇
見渡せば山もと霞む水無瀬川②夕べは秋となに思ひけむ（『新古今和歌集』巻一・春上）

C　千五百番歌合に、春歌　宮内卿
薄く濃き野辺の緑の若草に③跡まで見ゆる雪のむら消え（『新古今和歌集』巻一・春上）

D　題知らず　藤原俊成
誰かまた花橘に思ひ出でむ我も昔の人となりなば（『新古今和歌集』巻三・夏）

E　西行法師勧めて、百首歌詠ませ侍りけるに
見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ（『新古今和歌集』巻四・秋上）

F　摂政太政大臣家歌合に、湖上の冬の月　藤原家隆
志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる④有明の月（『新古今和歌集』巻六・冬）

G　百首歌の中に、忍ぶる恋を　式子内親王
玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば⑤忍ぶることの弱りもぞする（『新古今和歌集』巻十一・恋一）

H　東の方へ修行し侍りけるに、富士の山を詠める　西行
風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが⑥思ひかな（『新古今和歌集』巻十七・雑中）

問一　傍線部②「沢の蛍」はどのようなものであると作者は思っているか。

問二　傍線部②「夕べは秋」と考える根拠となる平安時代の随筆の(1)作品名と(2)作者名を漢字で答えなさい。

問三　傍線部③「跡まで見ゆる」とは、何の跡が何によって分かるのか。説明しなさい。

問四　Dの和歌の本歌を答えなさい。

問五　Eの和歌は、新古今和歌集の撰者の一人の作である。作者名を漢字で答えなさい。

問六　傍線部④「有明の月」とあるが、(1)一般的にはどのような月を言うのか。また、(2)ここではどのような月のことか。答えなさい。

問七　傍線部⑤「忍ぶること」が弱るとは、どういうことか。説明しなさい。

問八　「三夕の歌」と呼ばれる歌をA～Iの中から選び、記号で答えなさい。

問九　傍線部⑥の説明について次の空欄c、dに当てはまる語を書きなさい。

「思ひ」の「ひ」に（　c　）を掛け、（　d　）の縁語になっている。

問 九	問 八	問 七	問 六	問 五	問 四	問 三	問 二	問 一
c				(1)			(1)	
d								
							(2)	
				(2)				

学 年
組
番 号
氏 名
得 点

和歌（後拾遺和歌集・新古今和歌集）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　新古今和歌集についての基礎的事項、和歌について語意・解釈・修辞・文学史などの幅広く深い理解度を問う。特に語句の解釈を正確にさせ、内容読解についての確実な理解を必要とする。

☆解答例と配点

問一　作者の体から抜け出した魂ではないかと思っている。　〈5点〉

問二　(1)　枕草子　(2)　清少納言　〈4点×2〉

問三　雪が早く解けたか遅く解けたか（を示す形跡）が若草の緑の濃さや薄さによって分かる。　〈7点〉

問四　誰かまた花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする　〈5点〉

問五　(1)　夜が明けても空に残っている月　(2)　夜遅くに出た月　〈3点×2〉

問六　秘めた恋心を抑えることができなくなるということ。　〈6点〉

問七　藤原定家　〈4点〉

問八　E　〈3点〉

問九　c　火　　d　煙　〈3点×2〉

計50点